

面接技法の研究：特に外来面接設定でのクライアントと医療者の姿勢に関する動物行動学的研究

著者	吉山 直樹
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	41-42
発行年	2003-06
その他のタイトル	Clinical Reseachon Patient's Postureand Behaviorin Out-Patient Clinic
URL	http://hdl.handle.net/10631/485

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

面接技法の研究

—特に外来面接設定でのクライアントと医療者の姿勢に関する動物行動学的研究—

研究者 吉山直樹
新潟県立看護大学 (看護基盤科学)

Clinical Research on Patient's Posture and Behavior in Out-Patient Clinic
Naoki Yoshiyama
Niigata College of Nursing

キーワード：左抱き(baby-holding on the left side), ハート・ビート説(heart beat theory),
身体回転方向(change of physical posture), 右脳説(right brain theory)

目的

古くから、医学の教科書等では医師の外来診察の際には、左前に患者さんと向かって面接（診察）するよう記載されているが、その理由は明確に示されていなかった。

デズモンド・モリスの報告によると赤ちゃんを左抱きにする女性が約80%におよび、研究によって母親の心臓の拍動を感じることが赤ちゃんの精神的安定をもたらす、と結論している。医師の左前の姿勢もこの「ハート・ビート説」にて説明が可能か、と推定される。しかるに、最近、左の視野から入る情報が感情脳である右脳で処理されることから、左抱きも説明ができる、としたJ.T.マニングの学説が台頭してきた。

医師の診察姿勢のうち、患者に最も安心感を与える姿勢を探るため、研究計画を立案した。診断学では症候学的手法が駆使されるが、外来では人と人との融和が重視されることを考慮し、患者の精神状態を類推し診察環境改善に結びつけることを目的とした場合には、患者の行動学的分析が役立つと考えられた。

研究方法

1. 外来通院患者の診察時の目視に基づく患者の行動観察

1) 対象患者：4週に1回の頻度で外来通院している病状安定した高血圧／糖尿病患者 100名。観察項目は、椅子への座り方、アイコンタクト、血圧測定時の姿勢、背部診察の際の身体の回転方向、退去時の方向。分析データは、3ヶ月間の同一患者3回の観察記録に基づく。

2) 研究方法：①基本調査項目として、椅子への座り方、アイコンタクト、血圧測定時の姿勢、背部診察の際の身体の回転方向、退去時の方向、等を目視で観察し記録をおこなう。

②背部診察の際の身体の回転方向についてのみ、18ヶ月間同一患者を長期追跡観察。

2. 母親の乳児を抱く姿勢の研究

ホーム・ページ検索による。使用検索エンジンは「Google」。検索した単語としては「聖母子像」を入力。

3. 外来通院患者の診察時のデジタル記録に基づく患者の行動観察

1) 対象患者：4週に1回の頻度で外来通院している病状安定した高血圧／糖尿病患者 30名以上。

2) 研究方法：音声記録は、パソコンを利用しIBMの音声入力処理を使用、診察時の映像記録についてはDVカメラを使用し事後にデジタル処理をおこなう。音声記録は医師と患者の会話記録を分析対象とする。映像記録については、調査項目の確認の他、客観的な確認が困難なアイコンタクト等の些細な行動についても分析をおこなう。観察記録は、可能な限り同一患者2回以上の結果を分析対象とする。

研究結果

1. 外来通院患者の診察時の目視に基づく患者の行動観察

①基本調査項目：自力歩行で着席できる患者は96名。右側から着席する患者が80名 (83.3%)。

a. アイコンタクトは、入室時した瞬間に感知されるもの42名 (42.0%)。

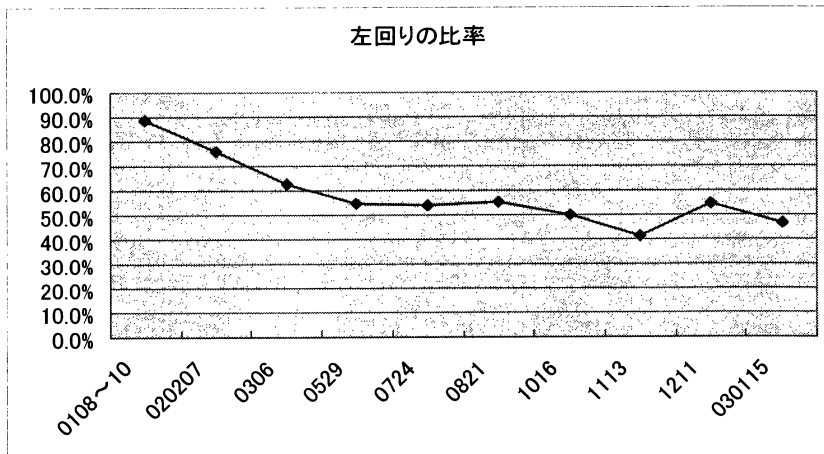
b. 血圧測定は右側にスタンド型を配置した場合、右腕が99名 (99.0%)、左に卓上型を設置した場合も右腕が43名 (43.0%)。

c. 背部診察時の身体回転方向は左回りが96名中85名 (88.5%)。

d. 退去方向は右方向からが96名中79名(82.3%)。

②長期追跡観察：背部診察の際の身体の回転方向について

研究者が始めて診察をおこなった2001年8月～10月では、ほとんどの患者(89%)は、背部診察のために身体の位置を変えさせると、左回り(医師の方から見ると右方向)に姿勢を変えた。6～7ヶ月経つと左回り・右回りがほぼ同数になった。



2. 母親の乳児を抱く姿勢の研究

Googleで「聖母子像」を検索し、1130件ヒット(平成15年1月22日)

1) 「イメージ」で画像を引き出すと、40件表示があった。

左抱き	中抱き	右抱き	無関係な画像	総計
21	2	4	11	40
72.4%	6.9%	13.8%		

2) 上位の100件のホーム・ページをすべて表示させ画像を判定。

左抱き	中抱き	右抱き	総計
80	9	19	108
74.1%	8.3%	17.6%	

(複数の画像が含まれているものがありトータル100ではない)

3. 外来通院患者の診察時のデジタル記録に基づく患者の行動観察

(現在データ集積中)

考察

研究者の外来環境は医師の右側に机が配置されている。患者が左回りの動作や左側の血圧計に右腕を出すのは不自由と考えられるが、調査結果では、身体を左回転させて右腕を出したり、背部の診察のために身体を回転させる患者が多かった。左回り回転行動の原因として推測されるのは、①無意識に心臓を保護する行動をとっている(「ハート・ビート説」)や親しくない相手には右前の姿勢をとりたい(「右脳説」)、②医師の姿勢(斜め左向き)に合わせている、等が推定されたが、②は否定的であった。また、今回の調査結果では医師-患者関係が浅いうちは、左回りに身体を回転させ、徐々に右回りに回転させる患者が増加して半年以上経過すると両者はほぼ同数となった。心理的な警戒心が解除されていく過程をみているのかもしれない。

結論

1. 患者が受診時に身体を、どちらの方向に回転させるか、観察したところ、患者-医師関係が希薄な期間では、左回転が優勢であった。回転方向は長期にわたり観察すると左右ほぼ拮抗する割合となった。
2. 患者の身体回転方向は、机・椅子の配置や医師の姿勢等の物理的影響はなく、患者の精神的緊張や医師に対する親和感等に左右されていると推定された。
3. 回転行動は、その根拠が「ハート・ビート説」であれ「右脳説」であれ、患者-医師関係を推定する観察項目として採用して良いのではないかと考えられた。